

「幽霊」と「神経病」 三遊亭円朝『真景累ヶ淵』の再編成

大橋崇行

一 はじめに

三遊亭円朝『真景累ヶ淵』は、もともと『累ヶ淵後日怪談』という演題で、安政六年頃に芝居噺による怪談噺・人情噺として高座にかけられたものだと考えられる。この演題については、延広真治氏なども指摘するように、円朝の師に当たる二代目の円生がすでに『累草紙』を創っていたと考えられ、その「後日」として位置づけられたものと思われる。

噺が創られた経緯については、明治二十三年一〇月一日の『読売新聞』に掲載された朗月散史の記事がしばしば引用される。これによれば、当時、芝居噺で評判を得ていた円朝は、書き割りや道具、鳴り物などを、あらかじめ高座に準備しておく

必要があった。しかし師である二代目の円生が、円朝とは別の噺をしようと打ち合わせていたにもかかわらず、円朝が準備していたものと同じ噺を先にしてしまうという事態が毎晩のように続いたという。同様の内容は、明治三二年八月一三日から三〇日にかけて『毎日新聞』に掲載された「芸人叢談／三遊亭円朝」においても、円朝自身の談話として残されている。

朗月散史の指摘するように円生が円朝を「励まさんとの心」を持っていかどうかは不明だが、そこで円朝は「師匠の未だ知らざる噺」を高座にかけてしまおうとして噺を創り、それが明治期に入って『真景累ヶ淵』となったとされている。

「円朝は狂言作者を抱へて飼ひ殺しにしてゐた」（柳家小三郎）（三代目）「明治の落語」、同好史談会『漫談明治初年』、昭和

二)との証言もあるため、創作における円朝の関与については留保が必要である。一方で落語の場合、一度できあがった噺をどのように演じるかは噺家の手に委ねられる。『累ヶ淵後日怪談』の場合もさまざまな変更を経て、特に明治期に入ってから素噺によって演じられるようになった。それが、明治二〇年九月九日から翌二一年三月一日にかけて『やまと新聞』誌上に小相英太郎と酒井昇造による速記が掲載された後、同二一年五月に井上勝五郎を発行人、表紙に蔵版元として「薫志堂」と記載されたポール表紙本の版權登録がなされ、刊行されたと考えられる。

現在速記として残っている噺は、大きく前半部分と後半部分とにわかれている。前半部分は、旗本の深見新左衛門が高利貸しをしていた皆川宗悦を斬り殺してしまったことをきっかけに生じた、新左衛門の長男である新五郎と宗悦の娘であるお園、新左衛門の次男・新吉とお園の姉・豊志賀(お志賀)との関係を中心とした因縁譚が展開される。後半は、名主となった惣次郎が富五郎の手引きによって殺されたことにはじまり、弟の惣吉が仇討ちを達成して名主・惣右衛門を襲名するまでを描いた物語となっている。

前半で怪談噺を、後半で仇討ちの物語を展開するのは、『怪談／牡丹燈籠』とよく似た構成である。一方で、『牡丹燈籠』

以上に、非常に複雑な内容になっている。

この『真景累ヶ淵』については、先行研究において、「仮名草子本『死霊解脱物語聞書』の影響を受けて創作された」^③と指摘されることがある。『死霊解脱物語聞書』が「仮名草子」であるかどうかについても問題があるが、たしかに『死霊解脱物語聞書』に見られる設定は散見される。一方で、もともと累の物語は『古今犬著聞集』卷十二「幽霊成仏之事」に収められたものであり、曲亭馬琴『新累解脱物語』(文化四)や、鶴屋南北『法懸松成田利劍』(文政六)から独立して演じられる『色彩間苺豆』があるだけでなく、永井啓夫氏が指摘し^④、越智治雄が詳細に検討している^⑤とおり、『累草紙』を中心に多くの「累物」を踏まえていたと考えるのが妥当であろう。したがって、単純に『死霊解脱物語聞書』の「影響」と位置づけるよりは、新版『円朝全集』の「後記」で延広真治氏が「五十余作を数える」と挙げているように^⑥、『古今犬著聞集』『死霊解脱物語聞書』以降に流布し、円朝の身近なところで語られていた「累物」の類型を辿りながら、多様な物語の類型も要素として組みこんだものと考えるのが妥当であろう。

このように考えた場合、この噺に登場する人物について考えるときにも注意を要する。たとえば、新吉を「愛されることしか知らない」男だと位置づけた塚本和夫氏の論^⑦を受け、佐藤

香織氏はそれぞれの作中人物について考察している⁷⁾。また幣旗佐江子氏は、『常陸国風土記』や『日本霊異記』において蛇と雷を同一視する枠組みや、『死霊解脱物語聞書』に描かれた因果応報という枠組みからこの断を読み解いている⁸⁾。

しかし拙稿で指摘したように⁹⁾、速記本をもとにしたテキストやこの時期の落語は、小説のように一つの〈作家〉として扱ったり、それを創った個人としての〈作家〉という近代的な枠組みから考えたりすることができないものではない。同時代の読書状況や、落語や講談、歌舞伎、草双紙などに描かれたさまざまな人物との関係の中で、それらの作品群に現れる人物がどのように編成され、その中で『真景累ヶ淵』に描かれた人物がどのように位置づけられるものであるのかという視点から考えられるべきものである¹⁰⁾。

一方で本論において問題としたいのは、「第一席」のマクラに見られる「怪談」をめぐる円朝の語りである。

今日より怪談のお話しを申上るが怪談話と申すハ近来大きに廃りまして余り寄席で致す者も御坐いませんと申すものハ幽霊と云ふものハ無い全く神経病だと云ふ事に成りましたから怪談ハ開化先生方ハお嫌ひ成被事で御坐い升

〔真景累ヶ淵〕「第一席」。引用は薫志堂版（明治二一）によ

る。以下、同じ）

『漫談明治初年』（前掲）に収められている初代三遊亭一朝の回想「円朝の死」によれば、「真景」の文字を標題に冠したのは糸野探菊（山々亭有人）と信夫恕軒の発案だとされている。改めて指摘するまでもなく、「開化先生方ハ」とあるため、この部分は江戸期にはなかったものであり、明治期に入ってから加えられた内容である。ここでは、「幽霊と云ふものハ無い全く神経病だと云ふ事に」なってしまい、そのため近年では怪談が廃れてしまったという認識が示されている。

三浦正雄氏は前掲の論文で、この問題を「円朝の怪異観」という視点で論じている¹⁰⁾。しかし『真景累ヶ淵』に見られる人物像の問題と同様、〈作家〉としての三遊亭円朝が個人の思想として「怪異観」が示されているとするよりは、「幽霊」の出現をそれを見る人間の「神経病」だと位置づける枠組みが同時代においてどのように編成されたのか、そうした枠組みが『真景累ヶ淵』とどのような関係にあったのかを考えていくべきである。

以上のような問題意識から、本論ではまず、「幽霊」を「神経病」だと位置づけるという枠組みの問題について具体的に考えていきたい。その上で、明治初年代から十年代にかけての言

説空間の中で『累ヶ淵後日怪談』に『真景累ヶ淵』という演題が付されたこととどのような意味があったのかについて、考察を進めていくこととする。

二 「幽霊」と「神経病」

『真景累ヶ淵』において「幽霊」を「神経病」だと位置づけた枠組みについては、さまざまに議論がなされてきた。たとえば宮信明氏は¹¹⁾、明治一三年一月に新富座で上演された河竹黙阿弥『木間星箱根鹿笛』が「神経病の二番目」と呼ばれたことや¹²⁾、高島藍泉『怪談深閨屏』(明治一七)、一竿齋宝洲『勸懲十八番／神経開化怪談』(明治一七)などを挙げて、こうした枠組みを明治十年代後半に流行したものとして捉えている。このとき、その背景として井上哲次郎抄訳・大槻文彦校訂『倍因氏／心理新説』(明治一五)や、井上円了による言説があったと指摘している。

『倍因氏／心理新説』については、亀井秀雄¹³⁾も同様の認識を示しており、『真景累ヶ淵』のマクラについて考えるときの定説となっている。一方で新版『円朝全集』の「後記」では¹⁴⁾、度会好一氏の指摘を根拠として¹⁵⁾、「神経病」の初出が宇田川榛齋『遠西医方名物考』だとした上で、『木間星箱根鹿笛』第

四幕を挙げている。

しかし、宇田川榛齋『遠西医方名物考』に見られる「神経病」は、「幽霊」との関係について述べたものではなく、井上円了による妖怪についての言説は円朝のマクラができるよりも遅い時期のものである。また、『倍因氏／心理新説』「恐怖ノ情」についても、記述されているのは次のような内容である。

(一) 恐怖ハ、身体上ニ於テハ、神経力ノ損失及ビ運輸ヲ表現ス、蓋シ有機作用ノ勢力、一時ニ暴脱シテ、知力上ト身体ノ行動上トニ集マルニ由ルナリ、

恐怖スルトキノ状態ハ、弛暢ト強張トノ二様ヲ呈露ス、(井上哲次郎抄訳・大槻文彦校訂『倍因氏／心理新説』、明治一五)¹⁶⁾

明治初期に日本に入ってきた心理学は、生理的、身体的側面から人間の心理を説明するというものだった。ここでも、「恐怖」(Terror)という感情を「神経力ノ損失」(a loss and a transfer of nervous energy)という観点から捉え、「弛暢」(relaxation)「強張」(tension)という身体的反応が現れるのを診ることによって、人間が恐怖感を抱いていることを判断することが可能になるとしている。その上で、こうした「恐怖」は

「知力」(Intellect)の面にも「苦痛」が与えられるのだという。このときに、「妖怪」との関係が論じられている。

知力ニ就キテ之ヲ言ヘバ、此情ノ資性ハ、甚ダ著シ、蓋シ氣力ヲ知覚上ニ用フルトキハ、非常ニ外物ニ感ジ易キ者ニテ、若シ妖怪出ヅト云ヒ伝ヘタル家ニ入ルトキハ、如何ナル音響ト雖モ、之ヲ聞取セント欲シ、風ノ吹キ来ルコトアレバ、乃チ恐れベキ妖怪ノ来リ近ヅクナラント思惟ス、 (同)¹⁷⁾

もし誰かが「妖怪出ヅ」と聞いてしまった家に入ったときには、たとえば風の音が聞こえたときに「妖怪ノ来リ近ヅクナラシ」と考えてしまうなど、人間の「知力」に錯誤が生じる。言い換えれば、こうした錯誤こそが人間に「妖怪」を感じさせているのであり、これらはすべて人間の「恐怖」に端を発するものだというのが、『倍因氏ノ心理新説』において示された枠組みである。

『倍因氏ノ心理新説』は、ヘインの『精神と倫理の科学』(Alexander Bain, *Mental and moral science: a compendium of Psychology and ethics*, 1868)の翻訳であり、「若シ妖怪出ヅト云ヒ伝ヘタル家ニ入ルトキハ」という部分は、原文では「In a house believed to be haunted」と書かれている。したがって

ここでの「妖怪」は、「Haunted」の翻訳語である。

「Haunted」は、ヘボン『和英語林集成』英和の部」初版(慶應三)および再版(明治五)において、「Haunt」の翻訳語として「Tszku」を挙げた上、¹⁸⁾「Haunted house」を「bake-mono-yashiki」としている他、柴田昌吉・子安峻『附音挿図ノ英和字彙』(明治六)では「Haunted」を「常ニ到ル処」^{トコロ}「隠所」^{カクレバ}とした上で「Haunted house」を「妖怪館」^{イカモノグサノミヤ}としている。また、青木輔清『英和掌中字典』(明治六)で「タビスミマハレル」○ツキシタガハレル、西山義行『英和袖珍字彙』(明治一七)で「タビスミマハレル。ツキシタガハレル。ワヅラハサレタル」とした上で、「Haunted house」は柴田昌吉・子安峻『附音挿図ノ英和字彙』と同様に「バケモノヤシキ」とされているなど、取り憑かれる、あるいは何かがずっと気になっている様子を表現する言葉として理解され、特に「Haunted house」が化物屋敷として翻訳されていた。したがって、井上哲次郎が「妖怪出ヅト云ヒ伝ヘタル家」と訳したのは、この語感が強く反映されたものだと考えられる。

「Haunted」を「妖怪」と結びつけるのは、「誰にも気のつく様なかなか明瞭な差別が、オバケと幽霊との間には有つたのである」(柳田國男「妖怪談義」、『日本評論』第一一巻第三号、昭和一一・三。引用は単行本の『妖怪談義』(第三版)、昭和三

二)と柳田國男が述べた「オバケ」を「妖怪」と解釈する枠組みが一般的になり、「幽霊」と「妖怪」とを切り分けて「Haunted」を「幽霊」と訳すことが多い現代においては違和感があるかもしれない。しかし、たとえば東江楼主人編『董蒙弁惑／珍奇物語 初編上』(明治五)では、「妖怪の説」として「兩夜には。幽霊の出しこと往々ありし」と記述されている。

また、加藤鉄太郎がさまざまな書物に現れる「妖怪」をまとめた『一読一驚／妖怪府』(明治一八)の冒頭には「剪灯新話」から引いてきた「牡丹燈」が挙げられている他、木村登代吉『啓蒙字類』(明治二〇)では「妖怪変化」の中に「幽霊」が含まれている。したがって、この時期の言説においては柳田國男が示したような「妖怪」と「幽霊」とのあいだの切り分けはなく、「幽霊」は「妖怪」の中に含まれる形で語られることが多かった。

こうした「幽霊」と「妖怪」との関係は、井上円了『妖怪学講義緒言』(明治二六)を見るとわかりやすい。円了にとって妖怪学の端緒は「然らば妖怪とは何ぞや其意義茫然として一定し難し或は曰く幽霊即ち妖怪なりと或は曰く天狗即ち妖怪なりと或は曰く狐狸の人を誑惑する是れ妖怪なりと(後略)」とあるように、「妖怪其者の解釈に至ては蓋し誰れも確然たる定説を有せざるべし」という状況を批判的に対象化することだった。

すなわち、「幽霊」と「妖怪」とが同一視される状況を踏まえ、双方の概念をより具体的に規定し、それぞれを切り分けていくことも、円了の妖怪学において重要な要素だったのである。

しかし、円朝が「幽霊と云ふものハ無い全く神経病だ」と述べたときの「神経病」という枠組みと、井上哲次郎『倍因氏／心理新説』や井上円了が示した「妖怪」とのあいだには、少なからず距離がある。そこで注目されるのは、次のような言説である。

癩痢ハ其発作ニ先テ前徴ヲ現ス者太タ罕ナリト雖ドモ時トシテ頭痛、眩暈、恐怖、妖怪ノ幻見或ハ本病固有ノ感覺ナル「オーラ」ヲ発スル者アリ即チ此「オーラ」ハ譬ヘハ虫ノ匍フカ如ク或ハ風ノ戦々タルカ如キ感覺ニシテ其意死モ空氣或ハ水アリテ体中ヲ流通シ手足ヨリ起リテ軀幹ニ昇騰スルヲ覺ユル者はナリ

(ハルツホルン氏著・桑田衡平講述『華氏／内科摘要』、明治五(八)¹⁸⁾

『華氏／内科摘要』は、チャールズ・ヘンリー・ハーツホーンの『医学に関する原理と実践の本質』(Charles Henry Harts-home, *Essential of the Principles and Practice of Medicine*,

1867) を翻訳したものである。原典と対照すれば、「癩癘」は「Epilepsy」の翻訳語であり、「妖怪の幻視」は原文で「spectral illusions」とあるのを翻訳したものとわかる。

「spectral」は『和英語林集成』『英和の部』初版（慶應二三）および再版（明治五）では見出し語として採録されていないものの、「spectre」が「Bake-mono: yurui」となっている。同様に、柴田昌吉・子安峻『附音挿図／英和字彙』（明治六）で、「spectral」が「怪物^{バクモノ}、幽霊^{ユウレイ}」、「spectre」が「怪物、幽霊」とある一方で、青木輔清『英和掌中字典』（明治六）では「spectral」が「エウレイノヨウナル」と「spectre」佐々木庸徳校『明治大成英和对訳字彙』（明治一八）で「Spectra」のみが採用されて「幽霊」と翻訳されているなど、この系統の語に対する翻訳語においては「怪物」「化物」の翻訳語が消失し、「幽霊」だけが残されていく傾向がある。

したがって、『華氏／内科摘要』の時点で「妖怪」と翻訳されていたのは明治初年代に見られる認識であり、これが明治一〇年代に入ると「幽霊」に限定されていった可能性が高い。その上で『真景累ヶ淵』に目を戻せば、語りの中で特に「神経病」という用語を使っていたことを考えても、円朝のマクラにより近いのは『華氏／内科摘要』に関わる言説だったと考えるべきであろう。

三 「神経病」言説の流行

ここで特に『華氏／内科摘要』が重要なのは、この本の刊行が終了する明治八年前後に、「幽霊」「妖怪」を幻視することを「脳及神経系諸病」の一つである「癩癘」の症状として位置づけるハーツホーンによる言説が、広く流布したためである。たとえば『読売新聞』紙上では、これに依拠したと思われる投稿が何度も繰り返されている。

たとえば、明治八年一月二四日の『読売新聞』では、「久世賀^{がねない}抜内」を名乗る人物が当時の新聞記事になっていた山形や栃木で起きた狐憑きの事件について「神経病を狐附と見做して御符^{まじ}だの祈禱^{きとう}だのと夫^{それ}がため病^{あまひ}を重^{おも}くする事も間々あります」と述べている。これを契機として、「幽霊」や「化物」を「神経病」とみなす発想についての論争が展開されていくこととなる。まず、二月五日に「湖面堂」の筆名で狐憑きはやはり「神経病」に違いないという反応があり、それに対して四月二三日の投書欄で「久世賀抜内」が、「神経病」であれば十人が十人別々の幻視をするはずだが、同じような症状が出るのは「神経病^{びんせうへい}の上^{じやう}の所業^{しやうごふ}でハない」と反論している。

また、頻繁に新聞に投稿を行っていた人物である中村一能が、

同年一月二七日の『読売新聞』に次のような文章を投書している。(9)

当時専ら流行する諸新聞一枚摺の錦画の中にハ折々幽霊や妖怪の姿が見えますが開化を導く新聞の画に化物の姿ハチト不似合な様に見はれます(尤も彼やうな事ハ神経病だとの御論が頭書に記載であるにもせよ)

『読売新聞』第二七九号、明治八・一二・二七

中村一能は、「幽霊や妖怪の姿」を錦絵新聞が多く取り上げていることを、批判的に記述している。新聞の使命は「開化を導く」ことにあり、その観点から考えて、「幽霊」や「妖怪」の類の出現を事件として取り上げることが、相応しくないとするのである。一方で、それらの記事には、こうしたものを見せしめるのは「神経病」のためであるという御論が「頭書記載である」という指摘も重要である。

たしかに明治七年頃から発刊が始まり、明治八年から九年にかけて一気に広まった錦絵新聞においては、刃傷沙汰や色恋沙汰に混じって、「幽霊」「妖怪」の出現に関する怪異現象の記事は大きな要素となっていた。

その中で「神経(心経)」や「神経病」と関連づけて書かれ

た記事は、『絵画百事新聞』第五七号のおゆきという女性が夫である次助の「幽霊」を見たという記事、同紙第一七五号(明治九・八・一二)で瀬戸物屋村田利八の娘が嫁ぎ先で亡くなった後仲睦まじい隣の家を羨んで人魂が出たのを「神経といふ気の迷ひ」とした記事、『大阪錦画新聞』第八号で明治八年三月二〇日に長崎の建蔵という男に追い出された妻が後妻に取り憑いたという事件を建蔵の「神経病」だと位置づけた記事などが確認できる。

錦絵新聞の場合は日付の記載がないことが多いものの、創刊時期や日付のある号との関係から考えると、「幽霊」に関する記事は錦絵新聞が刊行されていた時期を通じて見られる一方で、これを「神経病」と結びつけた記事はすべて明治八年から九年にかけてに集中している。したがって、『華氏/内科摘要』の翻訳や、『読売新聞』で「幽霊」と「神経病」との関係について言及された時期と重なっており、こうした言説が明治八年前後に小新聞や絵入新聞紙上で編成されたものだったことがわかる。

この他、明治九年一月三日の『仮名読新聞』では、名古屋の古渡町に住む大工・工藤藤九郎の妻であるお辰が、姑と仲が悪かったが、その姑が病のため亡くなったという記事が掲載される。その後、藤九郎が夜にお辰の顔を見ると、自分の母親

の最期のときそっくりに見えるということが何日も続き、それを妻に言ったところ、妻が発狂してしまった。その後、お辰を実家の大乗院へ出したところ、父は穴を掘って娘をそこに放り込み、狂い死にさせてしまい、その後はお辰の「幽霊」が出るようになったという。

毎例よく云神經病か伝染すると気の小さい女達は病附いてあたら命を種なしにしますから幽霊などハ跡方もないものだと記者が牡丹餅ほどの印を捺て確乎に保証致します

（『仮名読新聞』第二四〇号、明治九・一二・一三）

ここでは「幽霊」を「神經病」とみなし、これが「伝染」するとう発想が「毎例よく云」ことだと規定される。すなわち、「幽霊」の出現を「神經病」とみなす枠組みは、明治九年末の時点で少なからず定着していたのである。

また、これまで挙げてきた小新聞や絵入新聞紙上で語られた「幽霊」と「神經病」の言説は、怨恨を伴う刃傷沙汰や病死といった事件を三面記事的におもしろおかしく語る中で、文明開化の世において「幽霊」は「神經病」としてみなされるようになるべきだと論じ、あるいは「神經」の病として「幽霊」の出現を揶揄するような語り口になっている。こうした言説状況に

対し、円朝の『真景累ヶ淵』は異なる文脈を帯びている。

是が則ハち神經病と云つて自分の幽霊を脊負つて居る様な事を致します例へば彼奴を殺した時に斯ふ云ふ顔付をして眠んだが若しや己を怨んで居やアしないかと云ふ事が一つ胸に有つて胸に幽霊を拵らへたら何を見ても絶えず怪しい姿に見えます又其執念の深い人ハ生きて居ながら幽霊に成事が御坐います勿論死でから出ると定まつて居るが円朝ハ見た事も御座いませんが随分生ながら出る幽霊が御坐います彼の執念深いと申すのハ恐ろしいもので能く婦人が嫉妬の為に散髪と申すの処へ駈けて行く途中で巡査に出会しても少しも巡査が目に入りませんから突当る機に巡査の顔にかぶり付く様な事ぞ御坐います（『真景累ヶ淵』「第一席」）

「生ながら出る幽霊」とはいうものの、実際にここで語られているのは生き霊の類ではなく、嫉妬のために髪を振り乱して町中を走る女が「巡査の顔にかぶり付く」という状況である。したがって、ここで円朝が語っているのは、「幽霊」よりも生きている女の「執念」のほうがよほど怖いという内容である。

拙稿で考えたように⑩、こうした人間の情に焦点を当て、怪談斬と銘打ちながらも実際には人情斬を語っていくことこそが、

円朝による落語の特徴だった。このように『真景累ヶ淵』を人情漸の一つだと考えたとき、「神経病」の「神経」を「真景」と掛けた、条野探菊と信夫恕軒の発想との位置づけと、そこから与えられた『真景累ヶ淵』という演題の意味が見えてくる。

四 「真景」「真情」としての「執念」

まず「真景」という用語について、『円朝全集』の「後記」では、これがともと山水画にまつわるものとされている²⁾。また、幕末から明治期にかけては、歌川広重（初代）『東海道五十三次』（天保四〜五）の「今切真景」、歌川広重（二代目）『諸国名所百景』（安政六〜文久元）の「雲州広瀬真景」や「阿波鳴戸真景」、小林清親『東京五大橋之一両国真景』（明治九）などのように、本当の景色という意味あいでも所図会において使われることが多かった。

一方で漢語としての「真景」は、唐代以前にはあまり用例が確認できないため、比較的新しい語彙だったと考えられる。その中で道教の用語として用いられる場合があり、たとえば諸橋轍次の『大漢和辞典』には、「真景」の用例として一つだけ、宋代の張君房『雲笈七籤』巻八十「符圖部二」で「幽冥生真景、煥落敷靈文。」と「神仙真道混成図」の「上部第七真氣頌」を

説明した文章の中に見られる一文が挙げられている。また、『太平御覽』『道部三・真人下』には、「太極真人」が、「后南真人」から「中岳真人王仲甫」に向けて発せられた言葉を引用した中に、「雖接真景以餐霞、故未為身益。」とある。清代に黄元吉が書いた『樂育堂語録』巻一「十八」にも用例が見られるが、これらの「真景」は、ともに目の前にあるありのままの光景、本来の姿という意味を持っていると考えられる。

この他にも、唐代の詩人・賈島の五言律詩「劉景陽東齋」〔全唐詩〕巻五七二に「景陽公幹孫 詩句得真景」という一節が見られるが、『真景累ヶ淵』の「真景」について考えるときにより注目されるのは、曹雪芹・高鶚『紅樓夢』に見られる用い方である。

他曾有幾首四時即事詩雖不算好却是真情真景
（曹雪芹・高鶚『紅樓夢』「第二十三回」西廂記妙詞通戲語
牡丹亭艷曲警芳心」。引用は北京大学蔵本による）

怡紅院に住むことになった賈宝玉は、毎日のように宝釵や黛玉と、本を読んだり、琴を奏したり、歌を歌ったりして遊んでいる。その中で宝玉が作った「春夜即時」「夏夜即時」「秋夜即時」「冬夜即時」の四首の七言律詩について、語り手は「真情

「真景」が率直に表現されたものと評価している。

「春夜即時」以下四首は、たとえば「春」は、夜回りの拍子木が外から響いてくる夜、絹の夜具を敷いた帳の中に横たわり、夢の中に現れた人に思いを寄せているという歌である。また「冬」は、寒気が入り込んでくる部屋で眠れぬ夜を過ごすうち、侍女がお茶（茗）を選ぶことを知っているために、それを一緒に選んで煎じる喜びを詠んだものである。それぞれの季節に映し出される室内の情景と、そこで生じた心情とが折り重なる形で詠まれている。このように、「真景」は「真情」と一体のものとして用いられる場合があり、その際の「真景」とは、目の前の光景をそれを見ている主体の心境と重ね合わせることで、文学の表現を創りだしていくものだった。

『真景累ヶ淵』という演題を円朝に提案したのが糸野採菊と信夫恕軒だったことを考えれば、『紅楼夢』のような中国白話小説についての教養は、当然持っていたと考えるべきであろう。また、同時代における講談や落語と合巻、中国白話小説の関係を考えても、『真景累ヶ淵』の「真景」は、こうした白話語彙から持ってきたと考えたほうが自然である。

この場合、『真景累ヶ淵』における「真景」は、「真情」と関わるものだからこそ、「神経」の洒落として成立したことになる。「幽霊」は「神経病」という同時代に流行していた枠組み

だけで説明できるものではなく、累の物語に描かれた人間の「真景」、そしてそこにある「真情」を語ることに、文明開化が進んだ明治の世においても怪談噺を高座にかける根拠があるのであり、この点にこそ『累ヶ淵後日怪談』を「真景累ヶ淵」という標題に改めた意味があったのではなかったか。

只今でハ大抵の事ハ神経病と云て仕舞つて少しも怪しい事ハ御坐いません明かな世の中で御坐い升が昔しハ幽霊が出るのハ祟りが有からだ怨の一念三世に伝はると申す因縁話しを度々承まはりました事が御坐い升豊志賀ハ実に執念深い女で前申上た通り皆川宗悦の惣領娘で御坐い升

（『真景累ヶ淵』「第二十一席」）

「第二十一席」のマクラにおける円朝の語りは、やはり明治に入ってから加えられたものである。ここでは「幽霊」を「神経病」と考える「今」と、「因縁話」が語られていた「昔」とを対比的に語っているが、これは単に「昔」をノスタルジックに回顧しているわけではない。「第一席」のマクラでも語っていた「幽霊」と「神経病」の枠組みを繰り返しつつ、豊志賀の「執念」の話題へと移すことで、噺の焦点を組み替えているのである。



こうした豊志賀をはじめとする女の「執念」は、「フーウン執念深へえ女だナ」（第二十六席）という甚蔵が新吉に向かつて豊志賀について評した言葉や、「小さいつて是が何うも何と二十六年祟つたからネー執念深へ阿魔も有るもので」（第三十七席）と、作蔵がお賤にお累の墓を案内する場面などで繰り返される。その意味で『真景累ヶ淵』は、人間の「執念」という情をめぐる物語なのであり、この点については『累ヶ淵後日怪談』のときも大きくは変わらなかつたはずである。

しかしこのとき、特に「第三十七席」では、その直前で新吉を「所謂只今申す神経病で御坐い升から」「神経病だから段々数を掃除するに従つて気分も快く成て参り升」と、「第二十一席」と同じように女が抱えた「執念」と対比させる形で、新吉が「神経病」だという語りが差し挟まれている。このように円朝は、糸野探菊と信夫恕軒から与えられた「神経病」という枠組みを、語りやそれぞれの高座のマクラにたびたび差し挟むことによって、この物語が人間の「執念」をめぐる人情噺であることを前景化する演出に巧みに利用している。

ここで重要なのは、「神経病」になつてしまった「幽霊」よりも人間の「執念」のほうがよっぽど怖ろしいという発想そのものが、決して円朝の人間観、怪談観というものではなく、すでに同時代言説として編成されていたものだという点である。

今日ハ幽霊の次序に今一ツ申ましやう先ごろより牛込細工町の和田鈴木といふ餅やへ每ばん幽霊が出て嫁を喰ひつくとか咽喉をしめるとかいひ堪えかねるとて嫁がかけ出しましたが其後嫁ハ離縁に成り此度ハ四ツ谷辺の川島某の娘を嫁にいたしたるに幽霊の幽の字も出ないといふが是ハ先の嫁が悪いのゆる離縁をいたすといふ相談をするに悔しがって嫁が有りもしない事を世間へいひふらした事で有るといふ此幽霊より嫁の了簡の方がよほど怖い

（『読売新聞』第一〇八号、明治八・五・二四）

明治八年五月二四日の『読売新聞』に掲載された記事は『大坂錦画新聞』第二六号にも掲載されており、浅草並木町にある蝶屋という菓子屋での主人が向かいにある伊勢屋という天麩羅屋から借金をし、蝶屋の主人が店の形に取られた逆恨みをしながら亡くなってしまった直後から、伊勢屋の主人が体調を崩したという事件を扱っている。ここでは、伊勢屋が体を壊したのは、蝶屋の主人に悪いことをしたという思いから「神経病」を患って「幽霊」を見たのであり、よりいっそう文明開化が進んで「心が開けて来る」と、「幽霊」を信じる者もいなくなるだろうという文脈が示されている。



しかし引用箇所では、蝶屋と伊勢屋の話から「序」として「牛込細工町の和田鈴木」という餅屋の話に転じ、「幽霊」が嫁を喰う、嫁の首を絞めるといふ噂話があったという内容となる。しかしこの噂は、嫁が夫から離縁されそうになったのを「悔しがって」、夫の悪い評判を世間に流したものだといふ。それに対して記事の書き手は、「此幽霊より嫁の方がよほど怖い」という認識に至る。すなわちこの記事は、文明開化が進めば「幽霊」を信じる者はいなくなるだろうという認識だけでなく、本当に怖ろしいのは「幽霊」などではなく生きている人間の所業であり、その中で特に女性が抱えた怨恨に焦点を当てる書き方がなされているのである。

円朝が『累ヶ淵後日怪談』を『真景累ヶ淵』と改めた時期とこの記事との前後関係は不明である。しかしこうした記事の存在と、『華氏／内科摘要』で広まった「幽霊」を見るのが「神経病」だといふ枠組みが出た時期を考えれば、このように「神

経病」としての「幽霊」よりも女性の執念や怨恨に焦点を当てようとする考え方は、「幽霊」をめぐる言説において新聞をはじめとする活字メディアなどを通じて同時代に共有されていた枠組みであり、同時代の文化の中で当然起こりうる発想の一つだったと言えるだろう。

一方でこれは、「幽霊」が「神経病」だといふ江戸期に『累ヶ淵後日怪談』を語ったときにはなかった要素である。したがって『真景累ヶ淵』は、「神経」と「真景」の洒落を介して、洋の東西を問わずに新しく手に入れた知識や、聴衆がすでに知っている発想を巧みに啻に組み込んだものといえる。このことで、「神経病」と位置づけられた「幽霊」よりも人間の「執念」のほうがよほど怖ろしいということを前面に押し出す新たな演出が創りだされているのであり、それによって江戸期の『累ヶ淵後日怪談』から明治期の『真景累ヶ淵』へと再編成を行ったところこそが、三遊亭円朝という啻家の真骨頂だったのである。

- (1) 延広真治「咄における継承と創造——二代目円生から円朝へ」、『比較文学研究』第七〇集 平成九年
- (2) 三浦正雄「三遊亭円朝『真景累々淵』の怪異観——日本近現代怪談文学史8——」、『埼玉学園大学紀要 人間学部編』第二三号、平成二五年。
- (3) 永井啓夫「三遊亭円朝——明治期人情断の限界」、『芸能研究会編『日本の古典芸能 第九卷 寄席』平凡社、昭和四六年
- (4) 越智治雄「円朝追跡」、『国語と国文学』第四五巻第四号、至文堂、昭和四三年四月
- (5) 延広真治「後記」、『円朝全集 第五巻』岩波書店、平成二五年
- (6) 塚本和夫「真景累々淵」、『早稲田大学高等学院研究年誌』第四〇集、平成八年
- (7) 佐藤香織「真景累々淵」試論——新吉と四人の女——、『名城学院女子大学大学院人文学会誌』第五号、平成一六年
- (8) 幣旗佐江子「三遊亭円朝『真景累々淵』の研究——豊志賀を中心に——」、『比較文化研究』第二二号、平成二八年
- (9) 拙稿「文体様式としての『人情断』——三遊亭円朝『怪談／牡丹燈籠』と坪内逍遙『小説神髓』『文体論』との関係」、『東海学園言語・文学・文化』第一七集、平成三〇年
- (10) 注(2)に同じ。
- (11) 宮信明「素断との出会い——三遊亭円朝『真景累々淵』論——」、『立教大学日本文学』第一〇三号、平成二一年
- (12) 河竹繁俊『河竹黙阿弥』吉川弘文館、昭和三六年
- (13) 亀井秀雄「円朝口演における表現とはにか」、『日本文学』第三巻第八号、昭和四九年八月。
- (14) 注(9)に同じ。
- (15) 度会好一『明治の精神異説 神経病・神経衰弱・神がかり』岩波書店、平成一五年
- (16) 原文は以下の通り。「2. Terror: on the PHYSICAL side, shows both a loss and a transfer of nervous energy. Power is suddenly and extensively withdrawn from the Organic processes, to be concentrated on certain Intellectual processes, and on the bodily Movements./ The appearance may be distracted between effects of relaxation and effects of tension」(Alexander Bain, *Mental and moral science: a compendium of Psychology and ethics* 1868)
- (17) 原文は以下の通り。「With regard to the *Intellect*, the characters of the emotion are very marked. The concentration of energy in the perceptions and the allied Intellectual trains, gives an extraordinary impressiveness to the objects and circumstances of the feeling. In a house believed to be haunted, every sounds is listened to with avidity; every breath of wind is interpreted as the approach of the dreaded spirit. Hence, for securing attention to a limited subject, the feeling is highly efficacious」(Alexander Bain, *Mental and moral science: a compendium of Psychology and ethics*, 1868)
- (18) 原文は以下の通り。「Premotion occurs in a minority of cases before a seizure; headache, dizziness, terror, spectral illusions, or the epileptic aura. This is a creeping or blowing sensation, like that of a current of air or stream of water, beginning in a hand or foot, and extending toward the trunk. If it occur immediately precedes the paroxysm. (Charles Henry Hartshorne, *Essential of the Principles and Practice of Medicine* 1867)
- (19) 中村一能の新聞投稿については、石堂彰彦「一八七〇年代の新聞投書者の動向に関する一考察」(『成蹊大学文学部紀要』第四九号、平成二六年)に指摘がある。
- (20) 注(9)に同じ。
- (21) 注(4)に同じ。
- 付記 『真景累々淵』以外の本文の引用は、特に注記のない場合は初出紙誌にしたがった。その際、ルビは適宜省略し、字体は原則として現行のものに改めてある。